

雪の味

羽鷺びよん

雪の味

白の絵の具が足りなかった。

しかたなく僕は、白以外の絵の具たちで無数の雪の輪郭をつくり、背景をその雪のために塗りつぶした。そうして浮かび上がった画用紙の小さな白たちは、もとの白さ以上に白く存在感を放ち、青暗い空に舞い散る幾片の雪になった。

美術の丸藤先生は、画用紙の質感がそのまま雪の質感になっていると言い、雪の儚さも見事に表現できていると、この絵をひどく気に入ってくれた。

しかしそんなことよりも僕は、いろいろな色を混ぜ合わせてつくった、背景の青の方に、もう少し目を向けてもらいたかった。

僕はその青の中に混ぜ込んだ、緑や黄やマゼンタたちの、悲しみや喜び、安らぎを思った。

この青をつくりだすために犠牲となった、それぞれの色たちの。

そしてその青もまた、白のための青であった。

それくらい僕は白を見ると、その周辺の色たちに意識が飛ぶようになった。

白のそばで生きている、それら色たちの気持ちに思いを馳せるとき、僕は異様に興奮し、胸の高鳴りを覚えずにはいられなかった。

たとえばその対象は、白猫につけられた首輪の朱色だったり、白い建物に詰め込まれた窓枠の、汚れたモスグリーンだったりした。

また、あるときにはそれは、白い鍵盤の上で跳ねる、僕の指や爪の、中途半端な色白さやピンクだったりもした。

「東京はやっぱり、雪の味が違うね」

体育館脇の、桜の木の枝に積もった雪を手のひらですくい、くちの中に含むと、峻平は言った。

「どう違う？長野と」

僕が聞くと、峻平はしばし考えたあと、くちの中に残る後味が違うんだ、と言った。

そしてもう一度、枝の雪を指ですくった。

僕の目は、自然その雪の行方に釘付けになった。

峻平のくちの中にゆっくりと運ばれていく、その雪の純な白さと、それを招き入れんとしている、彼の舌の貪欲な赤さは、僕を興奮させ、ときめかせた。

雪は彼の赤い舌の上で、みるみるうちに溶けていった。

まったく肥厚していない、適度な薄さを保った彼の舌は、その涼しげなたちに似合わず、やはりとても熱いのだ。

溶けていった雪の喜びを思い、僕はひとり陶醉し、胸を熱くしていた。

そのとき、僕は思ったのだ。

白に対して卑屈にならず、対抗しえるもの。

それは唯一、人間の放つ色なのかもしれないと。

だって僕は感じたのだ、峻平の赤い舌やくちびるの向こうに、透明ないのちの輝きがあるのを。

その健康的な赤さに、僕は人間の美しさと、白に負けない高貴とを

感じた。

ふいに僕は、それを味わってみたい衝動にかられた。

雪で冷やされ、より赤く染まった彼の舌に僕の舌をからませ、心ゆくまで貪ってみたい。

そんな衝動に・・・・・・・・。

しかし、僕は踏みとどまった。

彼は大事な友人だった。こんなつまらぬことで、彼を失ってしまうわけにはいかない。

彼のいのちの美しさ、気高さを知れただけで、僕は十分満足したのだから。

「わかったよ。東京の雪と、長野の雪の味の違い」

僕は彼の講釈に、ひととおり耳を傾けた。

そして、また降り始めた雪の中で、僕らはしばし、雪の味について語り合った。